姫路市埋蔵文化財センター調査報告　第78集

姫路城城下町跡

―姫路城跡第394次発掘調査報告書―

2019

姫路市教育委員会

序

姫路城は本市の象徴であるとともに、日本が誇る世界遺産の一つです。江戸時代のはじめに池田輝政によって五重六階、地下一階の大天守をはじめとする建造物群が築かれて以来、400年を経た現在もその威容を誇っています。

姫路城下町は、姫山･鷺山を中心に螺旋状に巡らされた三重の堀によって、天守をはじめ城の中核施設が置かれた内曲輪、武家屋敷が立ち並んだ中曲輪、町人地･寺社を中心とした外曲輪に区分されます。このうち内曲輪と中曲輪の大半は世界遺産及び国の特別史跡として登録･指定され、保護･顕彰が図られています。

一方、外曲輪は近代以後、姫路の経済の中心地として発展し、現在も播磨地域の中核都市に相応しいまちづくりが進められています。今回調査を行った立町は、外曲輪南部の町屋地域に位置します。ここに発掘調査成果を報告し、姫路城跡の調査･研究の進展に資する所存であります。

最後に発掘調査の実施にあたり、多大なご協力を賜りました事業者様をはじめ、その他関係者各位に心から御礼申し上げます。

平成31年(2019年) 3月31日

姫路市教育委員会

教育長　松田　克彦

例　　言

1．本書は姫路市立町14番地で実施した姫路城跡第394次発掘調査の報告書である。

2．発掘調査は、店舗の建設に先立って実施した。

3．現地調査及び整理作業、報告書の編集は姫路市教育委員会生涯学習部埋蔵文化財センターが行った。

4．調査区平面図の作成に際しては世界測地系を使用し、本書で使用する方位は全て座標北である。また、標高は東京湾平均海水準(T.P.)を基準とした。

5．土層名は、『新版標準土色帳』(1999年度版)に準拠した。

6．本書で使用する遺構番号は、通し番号を付し、遺構の種類を前につけた。遺構番号は、調査時に使用したものを基本的に踏襲している。遺構種略号は次のように呼称する。

SK：土坑、SE：井戸、SD：溝

7．本書に関わる遺物・写真・図面等は、姫路市埋蔵文化財センターで保管している。

現地調査開始から整理作業終了までの体制

姫路市教育委員会

教 育 長　　松田克彦

教育次長　　名村哲哉

生涯学習部

　部　　長　　岡田俊勝

文化財課

　課　　長　　花幡和宏

　課長補佐　　大谷輝彦（調整担当）

　技　　師　　黒田祐介（調整担当）

埋蔵文化財センター

館　　長　　前田光則

課長補佐　　岡﨑政俊

係　　長　　森　恒裕

技術主任　　小柴治子

　　中川　猛

　　福井　優

　　南　憲和

　　関　　梓

技 師 補　　山下大輝（調査担当）

目　　次

目次
第１章　調査に至る経緯と経過
　　第１節　調査に至る経緯…… 1
　　第２節　調査の経過…… 1
第２章　遺跡の立地と環境…… 1
第３章　調査成果
　　第１節　基本層序…… 1
　　第２節　第１面検出遺構と遺物…… 2
　　第３節　第２面検出遺構と遺物…… 4
第４章　総括…… 5
参考文献

図目次

図１　調査地位置図（城郭図）…… 7
図２　調査区壁面土層断面図…… 8
図３　第１面平面図・各遺構断面図…… 9
図４　第１面各遺構断面図…… 10
図５　石組１、石列１実測図…… 11
図６　第２面平面図・各遺構断面図…… 12
図７　第２面各遺構断面図…… 13
図８　遺物実測図１…… 14
図９　遺物実測図２及び遺物写真…… 15

写真図版１　第１面全景（北半）（南から）
　　第１面全景（南半）（北から）
写真図版２　カマド１検出状況（東から）
　　カマド１完掘状況（東から）
　　カマド５検出状況（南から）
　　カマド５断面状況（南から）
　　カマド５断割状況（南から）
　　カマド５下部構造状況（東から）
　　SK6 断面状況（南西から）
　　SK23 断面状況（東から）
写真図版３　SK23 断面状況（南東から）
　　SK19・23 断面状況（西から）
　　SK35 断面状況（南東から）
　　SK36・37 検出状況（南西から）
　　石列１検出状況（北から）
　　石組１検出状況（南西から）
　　石組１検出状況（南西から）
写真図版４　第２面全景（北半）（西から）
　　第２面全景（南半）（北から）
写真図版５　2SK1 断面状況（南から）
　　2SK2 断面状況（南から）
　　2SK7 検出状況（東から）
　　2SK7 断面状況（南東から）
　　2SK7 下層断割状況（北から）
　　2SK28 断面状況（東から）
　　2SK43 断面状況（南から）

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

姫路市立町14番地において店舗建設が計画された。事業地は周知の埋蔵文化財包蔵地である姫路城城下町跡（県遺跡番号：020169）に所在する。

平成30年3月23日付で事業者より文化財保護法第93条に基づく届出が姫路市教育委員会宛にあった。届出の内容に基づいて協議を行い、平成30年４月17日に敷地内の3箇所において確認調査を実施した。調査の結果、全ての調査区で遺構を検出した。確認調査成果に基づき、工事により遺構面が影響を受ける389㎡を対象として、記録保存を図るため本発掘調査を実施することとし、平成30年6月26日に姫路市と事業者とで委託契約を締結した。

第２節　調査の経過

本発掘調査は、敷地内に残土置場を確保するため、2分割して実施した。平成30年7月10日に敷地南側から調査を開始し、8月21日から北側に調査を進めた。確認調査の成果に基づき、2面の遺構面を調査した。調査はバックホウで盛土・造成土等を除去した後、人力で遺構検出、遺構発掘を行い、適宜、記録写真撮影及び遺構実測を行った。9月28日に現地作業を全て終了した。現地調査終了後、姫路市埋蔵文化財センターにおいて出土品整理等を実施し、本発掘調査報告書の刊行をもって事業を完了した。

第２章　遺跡の立地と環境

姫路城城下町跡は、姫路市域を南北に流れる市川と夢前川によって形成された沖積平野のほぼ中央に立地する。姫路平野には古代より東西交通の要である山陽道が通り、東は丹波・有馬方面、西は美作・因幡方面に通じる。また南の海上には瀬戸内海航路があるなど陸海の交通の要衝であった。こうした地理的要因を背景として近世姫路城は成立した。池田輝政により、慶長6年（1601）から8年をかけて築城された姫路城は、平野部と独立丘陵である姫山・鷺山を利用した平山城である。市川の支流である船場川を西限とし、三重の堀によって内曲輪、中曲輪、外曲輪と縄張りされる（図1）。

調査地は、外曲輪南部に所在する。調査地周辺の道路は、絵図にも描写されており、近世段階から踏襲されていることがわかる。姫路城下町の絵図は江戸時代を通じて多く残されているが、町人地の住人あるいは所有者についての情報を記す絵図は少なく、調査地についてもその詳細は不明な点が多い。第二次本多氏時代（1682～1704）の『播州飾東郡国衙庄姫路図』によると調査地は「年寄加兵衛惣四郎」屋敷地の西隣にあたる。また『竪町地子銀帳』（万治3年（1660））によると調査地は北から「飴屋　太三郎」「から屋　長右衛門」「あらミ屋　与右衛門」「延末屋　吉兵衛」屋敷地に該当する（姫路市1996）。これらの屋敷地は調査地からみて西側に間口を持つ立町特有の屋敷構造をなしており、今回の調査地では4軒分の屋敷境に加え、背割り遺構の検出が予想された。

第３章　調査成果

第１節　基本層序（図2）

調査地の層序は地点によって異なるため、調査区東壁を基準として述べる。現地表は標高12.30m～11.78mで北から南へとやや傾斜する。地表面から0.25m～0.40mまでが現代盛土、その下に約0.20mの厚さで近代整地層がみられるが、この近代整地層を部分的に第二次世界大戦時の焼土層（以下、戦災焼土層）が切り込んで堆

積している。以下、0.25mの厚さで近世･近代整地層、0.10m～0.20mの厚さで近世整地層が順に堆積し、この下層に褐色細砂土からなる地山がある。調査は第１面を近世整地層上面、第２面を地山上面として行った。

第２節　第１面検出遺構と遺物(図3･4)

石組、石列、カマド、土坑等があり、時期はいずれも江戸時代以降である。以下に主要遺構の詳細を記す。

石組1　調査区東部の現代盛土直下で検出した南北方向の石組である(図5)。検出面での規模は南北長約6.9mである。石組を構成するのは間知石であり、東部は調査区外であるものの東面を揃える形で一列に配されているとみられる。検出状況から本遺構は石組溝の一部である可能性も考えられ、この場合、対をなす石組は調査区東側に位置することになる。また石組は調査区東側中央部以南では検出されなかったが、これは後世の撹乱を受けたことによるもので、本来は調査地南際の東西道路際まで延びていた可能性がある。明確な時期は判然としないが、上下の土層状況や間知石を使用していることから、江戸時代後期から近代の遺構と考えられる。

先述した絵図に拠れば、調査地は西に間口をもつ屋敷地内に該当し、また東側には間口を東に持つ屋敷地が明示されている。このことから本遺構は街区内の背割りである可能性が高い。

石列1　調査区南東部で検出した南北方向の石列である(図5)。検出面での規模は南北長約5.5mである。先述した石組１の延長線に位置し、同様に背割りを示すものであると考えられる。石列1は石組1と比較して約0.50～0.55m低い位置で検出した。また石列1を構成するのが間知石でないことからも、石組1との時期差が考えられ、石組1に先行する石列であると考えられる。ただ石組1同様、遺物がほとんど出土しないため、その構築時期、機能時期については提示できない。しかし第2面で検出した2SK2、2SK5、2SK46などが石列1に規制されたように石列1西側で完結していることから、これらの遺構と石列は同時併存した可能性が考えられる。

カマド1　調査区南西部で検出したカマドである。検出面での規模は径0.9m以上、深さ0.45mである。約半分以上が近現代の撹乱を受ける。断面観察から、地山を掘り込み基底部を造成し、その上に石を据え付けて炉壁を形成していることがわかる。遺物は出土しなかった。

カマド2　調査区南西部で検出したカマドである。調査区西壁の断面観察により確認した。近現代の撹乱を受け、カマドの規模や形状は不明である。カマド1及び後述するカマド5と南北軸に沿って検出されることから、その規模などは相同の関係にあると考えられる。

カマド3･4　調査区南西部で検出したカマドである。後述するカマド5の上層に構築されているが後世の撹乱により、被熱した炉壁の一部が検出されたのみで詳細については不明である。

カマド5　調査区南西部で検出したカマドである。検出面での規模は径1.0m以上、深さ0.52mである。約半分が近現代の撹乱を受けている。断面観察から炉壁およびカマド内部の構築過程が明らかになった。まず地山を掘り込み、基底部に石を据え付ける。この石は掘方に沿うように円形に据えられる。その後、平瓦と黄灰色土を交互に積み上げ、炉壁としている。

SK5　調査区南部で検出した土坑である。検出面での規模は径0.65m、深さ0.1mである。掘方は円形を呈する。埋土は黒褐色土であり、アサリやハマグリなどの二枚貝の殻が多量に出土した。貝片が出土することから遺構の性格としては廃棄土坑と考えられる。遺物は一定量出土し、そのうち2点を図化した(図8 - 1･2)。図8 - 1は土師器皿である。図8 - 2は施釉陶器碗である。高台は削り出しによる。

SK6　調査区南部で検出した土坑である。検出面での規模は最大径1.98m、深さ0.2mである。掘方は楕円形を呈する。埋土はSK5と類似する。出土遺物のうち、比較的年代観が明確である器種、当時の生活を読み解く上で重要であると判断したもの5点を図化した(図8 - 3～7)。図8 - 3は関西系焼締陶器の擂鉢である。擂り目は15条1単位で密に配される。また内面底部の擂り目は中央部から放射状に施されている。18～19世紀前葉のものと考えられる。図8 - 4は施釉陶器の急須、図8 - 5は白磁の紅皿である。図8 - 6は染付磁器である。高台内に

は「九谷」と記される。図8 - 7は施釉陶器の茶瓶の蓋で、つまみがつく。遺物は総じて江戸時代後葉と考えられる。

SK7　調査区南部で検出した土坑である。掘方は円形を呈する。SK6を切り込んで形成される。埋土はSK6と近似している。またSK6の擂鉢(図8 - 3)が、SK7で出土した擂鉢片と接合したことから、SK6及び7は本来一連の遺構であった可能性も否定できない。

SK8　調査区南部で検出した土坑である。残存状態の良い出土遺物2点を図化した(図8 - 8、図9 - 7)。図8 - 8は瓦質土器羽釜である。図9 - 7は中心飾り三葉文をもつ4回反転唐草文軒平瓦である。顎接合部に瓦当裏面から平瓦部にかけてのヨコナデが行われる。置塩城跡、姫路城跡と同文である。共伴する遺物との時期差は明確であり、混入である可能性が高い。

SK9　調査区南部で検出した土坑である。検出面での規模は最大径2.0m、深さ0.35mである。掘方は楕円形を呈する。SK13を切り込んで形成される。生活用具として使用されたもの8点を図化した(図8 - 9 ～ 13、図9 - 1･8･9)。図8 - 9は土師器皿である。口縁部に煤痕跡が確認でき灯明皿であることがわかる。図8 - 10は施釉陶器皿である。口縁部の煤痕跡から灯明皿であると考えられる。図8 - 11は土師質の小壺である。外面には墨書が記されており、地鎮に関連する遺物である可能性がある。図8 - 12は肥前系陶磁器のうち広東碗である。外面底部に「たて町／あらミや」と朱で記される。「あらミや」とは先述した『竪町地子銀帳』にみえる「あらミ屋 与右衛門」に関連する可能性が高い。図8 - 13は焙烙である。図9 - 1は右巻き三つ巴文軒丸瓦である。珠文は12個配される。図9 - 8は櫛状文の軒平瓦である。顎接合部には瓦当裏面から平瓦部にかかるヨコナデが行われる。図9 - 9は中心飾り下向き三葉文で2回反転唐草文軒平瓦である。顎接合部には平瓦部際から瓦当裏面にかけてのヨコナデが行われる。遺物は総じて19世紀ごろに比定される。

SK14　調査区北端で検出した土坑である。検出部の規模は径1.75m、深さ0.28mである。掘方は楕円形を呈すると思われる。出土遺物は近世のものが多いが近代以降のものがわずかに含まれることから後世の撹乱を受けているものと考えられる。そのうち1点を図化した。図9 - 2は右巻き三つ巴文軒丸瓦である。珠文は5個残存する。

SK19　調査区北部で検出した土坑である。検出部での長さ2.6m以上、深さ1.25mである。掘方は長方形を呈していたものと考えられる。埋土からは遺物が多量に出土した。このうち4点を図化した(図8 - 14 ～ 16、図9 - 10)。図8 - 14は染付碗である。外面には文字列が並ぶ。図8 - 15は肥前系陶磁器の広東碗である。図8 - 16は施釉陶器碗である。口縁部は一部内側に湾曲する。内面底部には目痕が確認できる。図9 - 10は中心飾り宝珠文の唐草文軒平瓦である。遺物は総じて18世紀後葉から19世紀にかけてのものと考えられる。

SK23　調査区北部で検出した土坑である。検出面での規模は径3.58m以上、深さ1.4mである。掘方は楕円形を呈する。SK19を切り込んで形成される。埋土は６層からなり、堆積状況をみると、土層境が明瞭であること、遺物出土量の粗密もみられることから一度に土坑を埋めたのではなく、複数段階的に分けて埋められたものと想定することができる。遺物も多量に出土し、そのうち12点を図化した(図8 - 17 ～ 26、図9 - 3･4)。図8 - 17は丹波系の甕である。図8 - 18は土師器皿である。口縁部には煤が付着することから灯明皿であることがわかる。図8 - 19は脚付灯明皿の脚台部である。図8 - 20は施釉陶器碗である。図８ - 21は施釉陶器の蓋である。外面には波状文が施される。図8 - 22は施釉陶器の茶瓶蓋である。釉は灰白色を呈する。図8 - 23は染付碗である。図8 - 24は、25は施釉陶器皿である。煤痕跡から灯明皿であると考えられる。外面に銅銭が付着する。内面には目痕がみられ、3条の線刻が刻まれる。図8 - 26は「暦茶碗」である。外面体部に「十小　朔日□…／十一大　朔日　午□…／冬至廿四日／十二小　朔日　子／室入九日□九ツ□／歳徳明之方／天保十六乙巳歳／申酉之間／」と記される。天保年間(1831 ～ 1845)は15年間であるが「乙巳歳」を基に考えると、天保16年にあたる弘化2年(1846)が「乙巳歳」に該当している。図9 - 3は右巻き三つ巴文軒丸瓦である。珠文は12個配される。図9 - 4は右巻き三つ巴文軒丸瓦である。珠文は9個残存する。

SK31　調査区で検出した土坑である。検出面での規模は径1.5m、深さ0.2mである。埋土は黒褐色土である。

SK32に切り込まれる。遺物は出土しなかった。

SK32　調査区中央部で検出した土坑である。検出面での規模は径2.8m、深さ0.65mである。掘方は円形を呈する。SK33を切り込んで形成される。埋土は6層からなり、瓦片が多量に出土した。本報告では、瓦片のうち唯一の軒瓦を図化した(図9 - 11)。図9 - 11は中心飾りに九弁をあしらう軒平瓦である。中心飾りの両脇に三つ葉表現が配される。

SK33　調査区中央部径2.2m、深さ0.75mである。掘方は円形を呈する。埋土から瓦片が多量に出土した。SK32と埋土の土質が近似している点や、出土遺物の傾向から、関連する遺構であると考えられる。

SK35　調査区中央部東部で検出した。掘方は円形を呈すると思われる。SK33、SK36に切り込まれる。出土遺物のうち、残存状況の良好なもの2点を図化した(図8 - 27･28)。図8 - 27は土師器皿である。外面底部には糸切痕が確認できる。図8 - 28は肥前系陶磁器の碗である。絵付などの装飾はない。

SK36　調査区中央部東側で検出した土坑である。検出面での規模は径1.49m、深さ0.22mである。隣接するSK37を切り込んで形成される。埋土は2層からなり、上下層ともに瓦片が出土した。

SK37　調査区中央部東側で検出した土坑である。検出面での規模は径2.35m以上、深さ0.27mである。埋土は2層からなる。遺物は少量出土しており、そのうち4点を図化した(図8 - 29 ～ 32)。図8 - 29は土師器皿である。内外面、口縁部に煤が付着することから灯明皿であることがわかる。図8 - 30は肥前系陶磁器の碗である。図8 - 31は染付碗である。図8 - 32は唐津焼の碗である。

SK38　調査区中央部で検出した土坑である。検出面での規模は径3.55m、深さ0.52mである。埋土は黒褐色粗砂で、10cmほどの礫を大量に含む。遺物はほとんど出土しなかった。

また第1面検出中には特異な軒丸瓦が出土した(図9 - 5)。瓦当文様は右巻き三巴文で、珠文は３個残存する。巴文尾部が輪状を呈するのが特徴である。時期は判然としない。

第３節　第2面検出遺構と遺物(図6)

地山面で検出した遺構である。土坑などがあり、遺構番号の前に「2」を付した。以下では主要遺構の詳細を記す。検出した遺構はすべて近世のものであるが、便宜的に第2面検出として述べることとする。

2SK1 - 1　調査区南西部で検出した土坑である。検出面での規模は径1.42m、深さ0.52mである。掘方は円形を呈する。後述する2SK1 - 2を切り込んで形成される。埋土は黒褐色土で鉱滓が多量に含まれる。埋土は2SK1 - 2と近似しており、時間差はさほどないと考えられる。埋土からは鞴の羽口などが出土した。そのうち3点を図化した(図8 - 33 ～ 35)。図8 - 33は鞴の羽口である。図8 - 34は土師器である。図8 - 35は施釉陶器である。

2SK1 - 2　2SK1 - 1の東隣で検出した土坑である。検出面での規模は径1.75m、深さ0.71mである。埋土には鉱滓が多量に含まれ、鞴の羽口が出土した。

2SK2　調査区南東部で検出した土坑である。検出面での規模は径2.4m以上、深さ0.68mである。掘方は円形を呈する。2SK1 - 2との切り合いは上層の撹乱により不明である。埋土は2SK1と酷似しており、鉱滓を多量に含む。埋土から鞴の羽口などの遺物が少量出土した。図8 - 36は肥前系陶器の碗であり、年代観は17世紀中葉とみられる。

2SK3　調査区南部で検出した土坑である。検出面での規模は径1.3m、深さ0.5mの土坑である。埋土は２層からなり、下層からは瓦片が一定量出土した。

2SK4　調査区南部で検出した土坑である。2SK5を切り込んで形成され、2SK47に切り込まれる。遺物は軒平瓦が出土した(図9 - 12)。図9 - 12は中心飾り三葉文に2回反転唐草文を配する軒平瓦である。瓦当文様からみて近世前期ごろと考えられる。

2SK5　調査区南東部で検出した土坑である。検出面での規模は径1.35m、深さ0.25mである。埋土には炭が多

量に含まれる。出土遺物のうち1点を図化した(図8 - 37)。図8 - 37は関西系焼締陶器の擂鉢である。産地は明石もしくは堺と考えられる。内面には9条1単位の擂目が施される。

2SK6　調査区南西部で検出した土坑である。検出面での規模は最大長3.5m以上、深さ0.3mである。埋土は2層からなり、いずれの層にも鉱滓が含まれるがとくに上層に著しい。埋土は2SK 1・2と酷似する。

2SK7　調査区南部で検出した土坑である。検出面での規模は最大長3.5m以上である。標高10.05mの地点で0.27m～0.45mの石が東西方向に並んでいるのを確認した。また西端では土坑の周囲を石で囲む遺構を検出した。遺構の性格は判然としない。

2SK16　調査区中央部で検出した隅丸方形の土坑である。検出面での規模は最大長0.94m、深さ0.17mである。掘方は方形を呈する。遺物は埋土中からまばらに出土した。そのうち図化に耐えうる2点を図示した(図８ - 38・39)。図8 - 38は施釉陶器鍋である。取手が2箇所に付く。底部には3箇所、重ね焼き時の目跡が残る。図8 - 39は脚付灯明皿である。皿部内面には釉が施される。外面体部はわずかに変色することから、使用痕跡とみられる。また焙烙も出土した(図9右下)。口縁部にはその両端に刺突痕がみられる。これは焙烙自体に上から蓋などの器具を乗せた際に固定させるためのものである可能性がある。口縁部から体部にかけて火を受けており、使用されていたものであることがわかる。

2SK23　調査区北部で検出した溝状を呈す土坑である。2SK22に切られ、2SK24を切る。検出面での規模は東西2.8m、幅0.5m、深さ0.08mである。断面は浅い皿状を呈し、性格は判然としないが2SK7と同じように町屋の敷地に対して平行に延びており、何らかの施設、区画に伴う可能性がある。

2SK24　調査区北部で検出した土坑である。検出面での規模は径2.5m、深さ0.55mである。掘方は円形を呈する。埋土は5層からなり、2SK23、2SK44に切り込まれる。

2SK28　調査区中央部西部で検出した土坑である。検出面での規模は幅0.55m、深さ0.72mである。掘方は東西にやや長い隅丸方形を呈する。他の土坑と異なり、垂直に掘り込まれている。埋土は2層からなり、下層には比較的礫を多く含んでいる。遺構をうかがわせる遺物等の出土がなく、詳細は不明である。

2SK33　調査区中央部で検出した土坑である。検出面での規模は径0.58m、深さ0.1mである。2SK16に切り込まれる。

2SK43　調査区北東部で検出した。検出状況では土坑と判断したが、遺構の下部において南北方向の溝状に掘り込まれており、調査区の北側へ延びる溝の可能性もある。検出面での規模は最大長3.2m以上、深さ約1.0mである。埋土は5層からなる。遺物は1、2層からまばらに出土した。そのうち図化に耐えうる4点を図化した(図8 - 40～42、図9 - 6)。図8 - 40、41はいずれも土師器皿である。口縁部がやや外反する。図8 - 42は肥前系陶器碗である。図9 - 6は右巻き三つ巴文軒丸瓦で、珠文は14個配される。巴文それぞれの尾が結合し、円状を呈する。瓦当裏面中央部には工具痕が確認でき、下半縁に沿ってナデが行われる。遺物量が少ないが出土遺物の様相から17世紀前半に位置づけられる。

2SK44　調査区北部で検出した土坑である。規模は径2.1m、深さ0.8mである。時期を決定できる遺物の出土はない。

2SK45　調査区中央部で検出した土坑である。上部は撹乱を受けており、下半のみ残存していた。検出面での規模は径0.74m、深さ0.13mである。埋土は2層からなり、上層には礫がまとまった状態で含まれていた。

第４章　総括

今回の調査で検出した特筆すべき遺構と性格についてまとめる。石組1と石列1の両遺構は、時期の異なる背割りである可能性が高いということは先述したとおりである。時期差は石組1と石列1の構造で明らかである。

敷衍すると間知石で構成された石組か、自然石を用いた石列かの差である。また先述した層位関係も時期差を裏付ける材料となろう。石組1の機能時期は上述のとおり、間知石の使用や石列1との層序関係から、江戸時代後期から近代と想定することができる。石列1の機能時期については、出土遺物が少なく判然としないが、鞴の羽口や鉱滓が検出された2SK2、2SK5などの土坑群と対応する可能性が高い。これは2SK2、2SK5などの石列際の遺構が、石列の手前で完結することがその傍証となり得る。さらに2SK2からは17世紀中葉の遺物が1点出土している。1点だけで遺物の時期を決定することは憚られるが、石列1の機能時期を考える上での参考資料となろう。これらのことから今回検出した石組、石列による敷地境は、近世中葉段階に構築されて以来、その区割が近代まで踏襲されたとみることができる。次に検出遺構の分布と性格に着目する。まず遺構分布であるが、第1面においてはSD 1周辺に遺構が少なく、またSK19とSK31、32を境に土坑の規模が異なる。また第2面においても、2SK7周辺には比較的遺構が乏しく、2SK23あたりを境に土坑の規模が異なることがわかる。第1、2面ともにおよそ同位置で遺構の多寡、遺構規模に差がみられた。遺構の性格からは、2SK7以南には焼土や鉱滓を大量に含んだ土坑群が分布するのに対し、以北にはそのような遺構は皆無であることがわかる。これらの成果を以って『竪町地子銀帳』(万治3年(1660))の当調査地についての記述を参考に勘案すると、調査地は南際から「延末屋 吉兵衛」「あらミ屋 与右衛門」「から屋 長右衛門」「飴屋 太三郎」屋敷地と比定できる(註1)。

上述内容と既往調査から、遺構分布における遺構の多寡や性格の違いから屋敷地境を示す可能性を窺うことができよう。今回の調査では、焼土や鉱滓が多量に出土した範囲は限定的で、一般的な土坑群とは区別できる。この背景には職種による差異が廃棄するモノの違いに繋がるとも考えられる。つまり焼土や鉱滓を多量に含む土坑が多い区域は、鍛冶関連施設の存在や鉱滓などの廃棄場所であった可能性も考えられる。城下町屋敷地の空間復元には、今回の調査成果はもちろん既往の調査成果も含め、絵図や文献資料との相互の検討を重ね、今後更なる検証を行う必要があることは言うまでもない。

註釈

1)この比定は、城下町絵図に描写されていることから江戸時代から踏襲すると考えられる調査地南に通る東西道路の北肩を基準に、文献資料に記述された屋敷地の寸法をあてはめたもので、参考として捉えていただきたい。

参考文献

姫路市　1996『姫路市史 第十一巻　上　史料編　近世2』 姫路市史編集専門委員会

九州近世陶磁学会　2000『九州陶磁の編年 - 九州近世陶磁学会10周年記念 - 』 九州近世陶磁学会

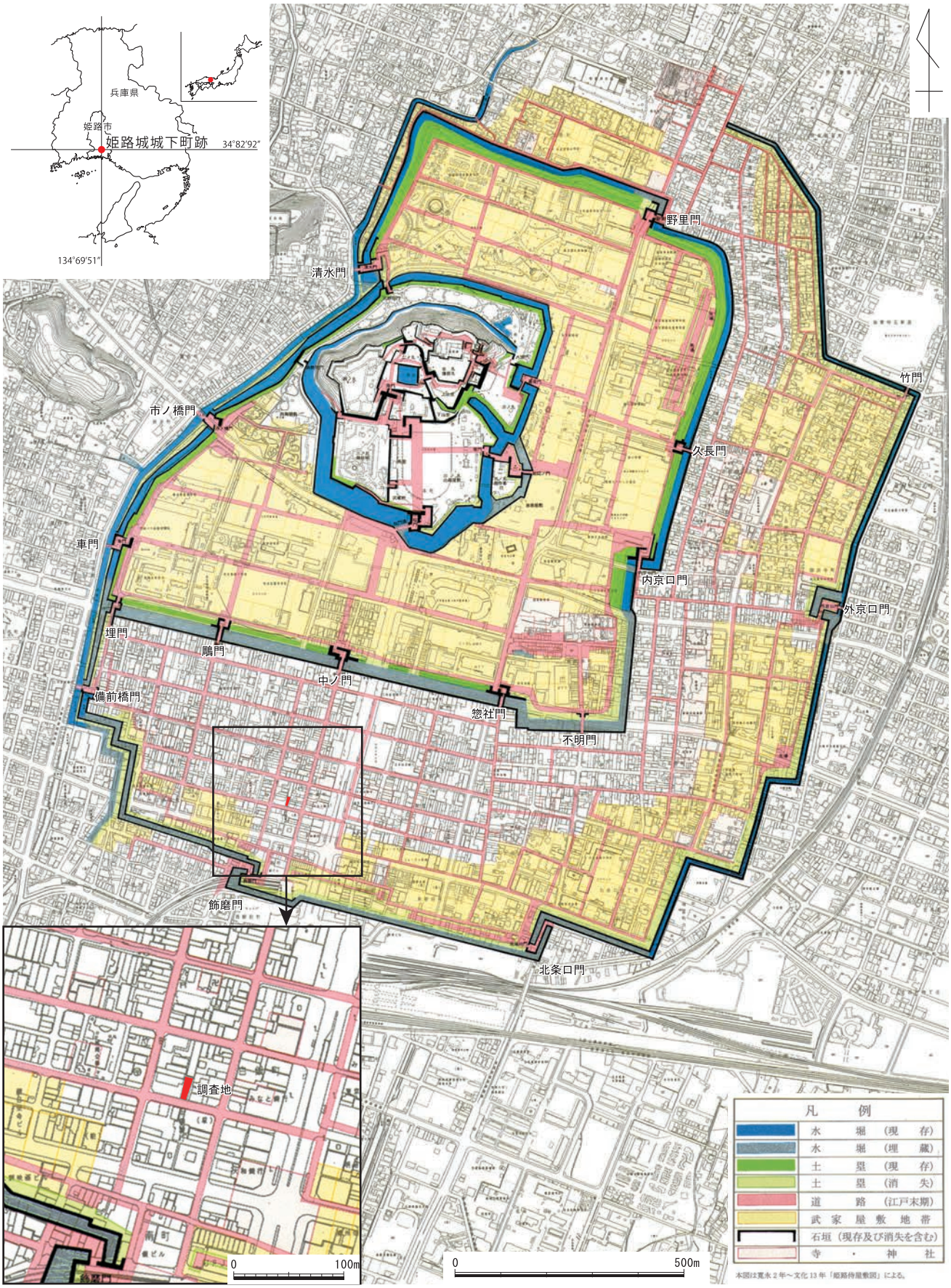
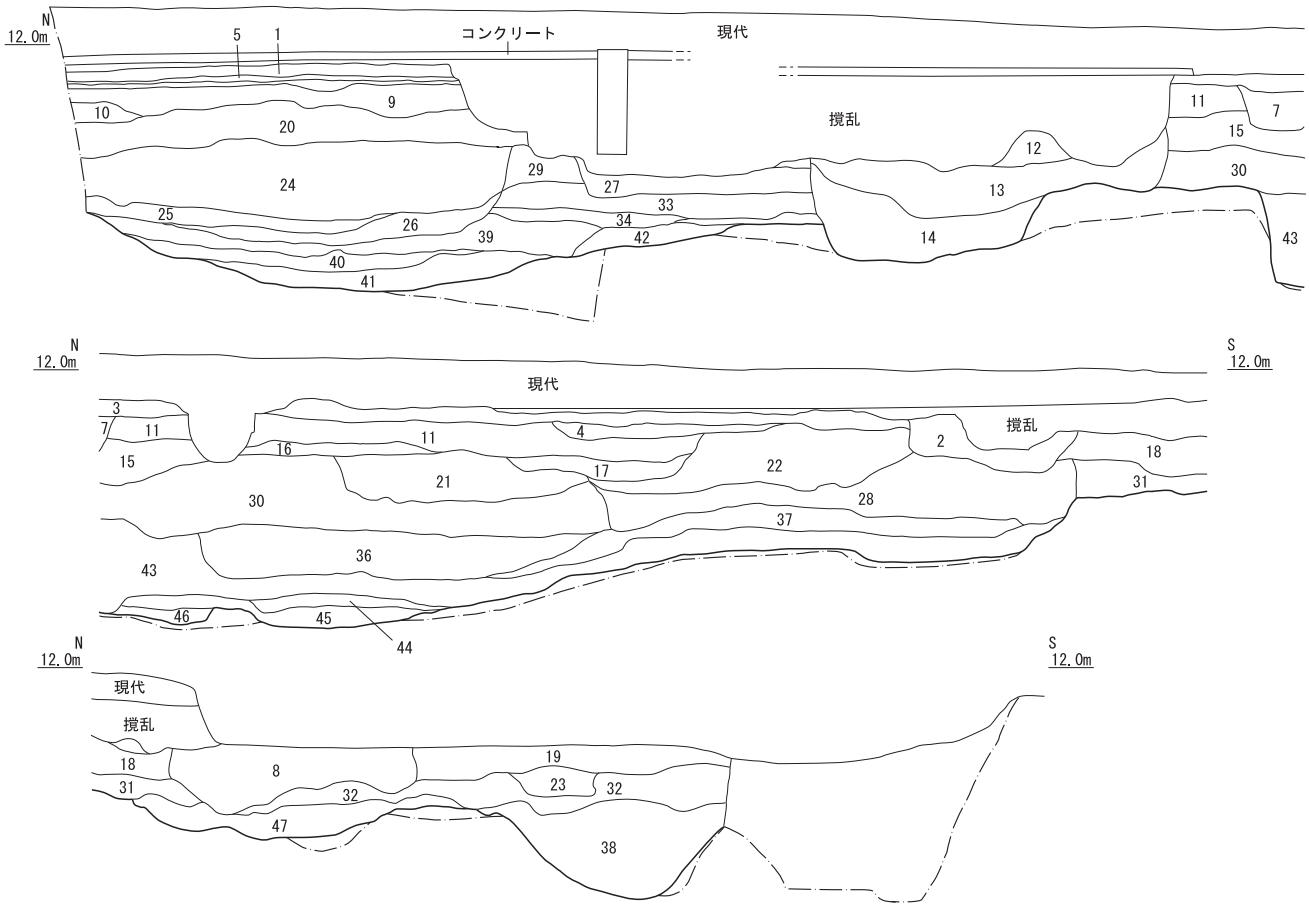


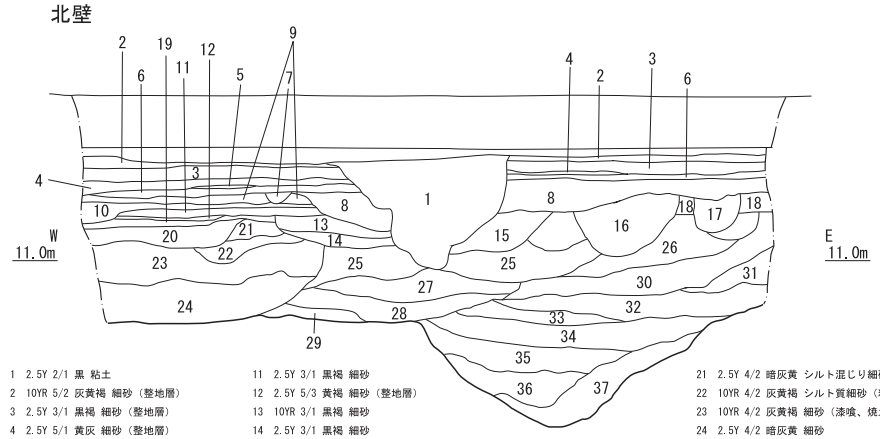
図1　調査地位置図（城郭図）（S=1：5,000・S=1：12,000）

東壁



1 10YR 5/2 灰黄褐 細砂（整地層）（北壁 2 層に対応）
2 2.5Y 5/2 暗灰黄 細砂（瓦、漆喰含む）
3 10YR 3/1 黒褐 細砂（近現代盛土）
4 10YR 3/1 黒褐 粗砂（漆喰含む）
5 2.5Y 3/2 黒褐 細砂
6 2.5Y 3/1 黒褐 細砂（整地層）（北壁 3 層に対応）
7 10YR 3/1 黒褐 粗砂（焼土混じり）
8 2.5Y 3/2 黒褐 粗砂（瓦含む）
9 10YR 3/1 黒褐 細砂（整地層）（北壁 6 層に対応）
10 2.5Y 3/1 黒褐 細砂
11 10YR 3/1 黒褐 細砂（近代整地層）
12 2.5Y 4/1 黄灰 細砂
13 2.5Y 5/1 黄灰 粗砂混じり細砂
14 2.5Y 5/1 黄灰 細砂
15 2.5Y 4/2 暗灰黄 細砂
16 2.5Y 3/1 黒褐 シルト
17 2.5Y 4/2 暗灰黄 細砂
18 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色 粗砂（整地層）
19 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐 粗砂（整地層 18 層に対応）
20 10YR 4/2 灰黄褐 粘質土（砂混じり）（北壁 31 層に対応）
21 10YR 4/2 灰黄褐 細砂
22 10YR 4/2 灰黄褐 細砂（下位に礫含む）
23 2.5Y 5/3 黄褐色 細砂
24 2.5Y 4/2 暗灰黄 細砂（北壁 32 層に対応）
25 2.5Y 4/2 暗灰黄 粗砂混じり細砂（北壁 33 層に対応）
26 2.5Y 5/2 暗灰黄 粗砂
27 2.5Y 5/2 暗灰黄 細砂
28 2.5Y 4/2 暗灰黄 細砂
29 10YR 5/1 褐灰 細砂
30 2.5Y 4/2 灰オリーブ 細砂（下位に礫含む）
31 2.5Y 3/2 黒褐 粗砂（近代整地層）
32 2.5Y 3/2 黒褐 粗砂（2.5Y 黄褐 5/4 細砂混じり）（近代整地層）（31 層と対応）
33 2.5Y 5/4 黄褐 細砂
34 2.5Y 4/1 黄灰 粗砂
35 2.5Y 5/1 黄灰 粗砂混じり細砂
36 5Y 5/1 オリーブ褐 細砂（礫混じり）
37 2.5Y 4/2 灰オリーブ 粗砂（礫混じり）
38 2.5Y 3/2 黒褐 粗砂（鉱滓多量含む）
39 2.5Y 5/1 黄灰 粗砂
40 2.5Y 5/6 黄褐 砂礫
41 2.5Y 5/1 黄灰 砂礫
42 5Y 5/1 灰 粗砂混じり細砂
43 2.5Y 5/1 黄灰 細砂
44 2.5Y 5/1 黄灰 粗砂混じりシルト
45 2.5Y 5/1 黄灰 シルト混じり粗砂
46 2.5Y 5/3 黄褐 細砂
47 2.5Y 3/2 黒褐 粗砂（鉱滓含む）

北壁



1 2.5Y 2/1 黒 粘土
2 10YR 5/2 灰黄褐 細砂（整地層）
3 2.5Y 3/1 黒褐 細砂（整地層）
4 2.5Y 5/1 黄灰 細砂（整地層）
5 2.5Y 5/2 暗灰黄 粗砂（整地層）
6 10YR 3/1 黒褐 細砂（整地層）
7 2.5Y 5/2 暗灰黄 細砂
8 2.5Y 4/1 黄灰 細砂
9 2.5Y 3/2 黒褐 粗砂（瓦多量に含む）
10 10YR 3/1 黒褐 粗砂（礫多量）
11 2.5Y 3/1 黒褐 細砂
12 2.5Y 5/3 黄褐 細砂（整地層）
13 10YR 3/1 黒褐 細砂
14 2.5Y 3/1 黒褐 細砂
15 2.5Y 5/6 黄褐 細砂
16 2.5Y 5/6 黄褐 シルト混じり細砂
17 2.5Y 4/2 暗灰黄 シルト混じり細砂
18 2.5Y 4/3 オリーブ褐色 シルト
19 2.5Y 4/1 黄灰 細砂（焼土多量に含む）
20 2.5Y 5/2 暗灰黄 シルト質細砂
21 2.5Y 4/2 暗灰黄 シルト混じり細砂
22 10YR 4/2 灰黄褐 シルト質細砂（粘質）
23 10YR 4/2 灰黄褐 細砂（漆喰、焼土含む）
24 2.5Y 4/2 暗灰黄 細砂
25 2.5Y 4/2 暗灰黄 細砂（粘質）
26 2.5Y 5/3 黄褐 細砂
27 2.5Y 4/2 暗灰黄 細砂
28 2.5Y 4/2 暗灰黄 細砂（瓦少量含む）
29 2.5Y 4/3 暗灰黄 細砂
30 2.5Y 4/2 暗灰黄 細砂
31 10YR 4/2 灰黄褐 粘質土（砂混じり）
32 10YR 4/2 灰黄褐 粘質土
33 2.5Y 5/1 黄灰 細砂
34 2.5Y 4/2 暗灰黄 細砂
35 2.5Y 5/4 黄褐 細砂
36 2.5Y 5/6 黄褐 細砂
37 2.5Y 5/1 黄灰 細砂（2.5Y 灰白 7/1 細砂混じり）

0 1m

図2　調査区壁面土層断面図（S=1:60）

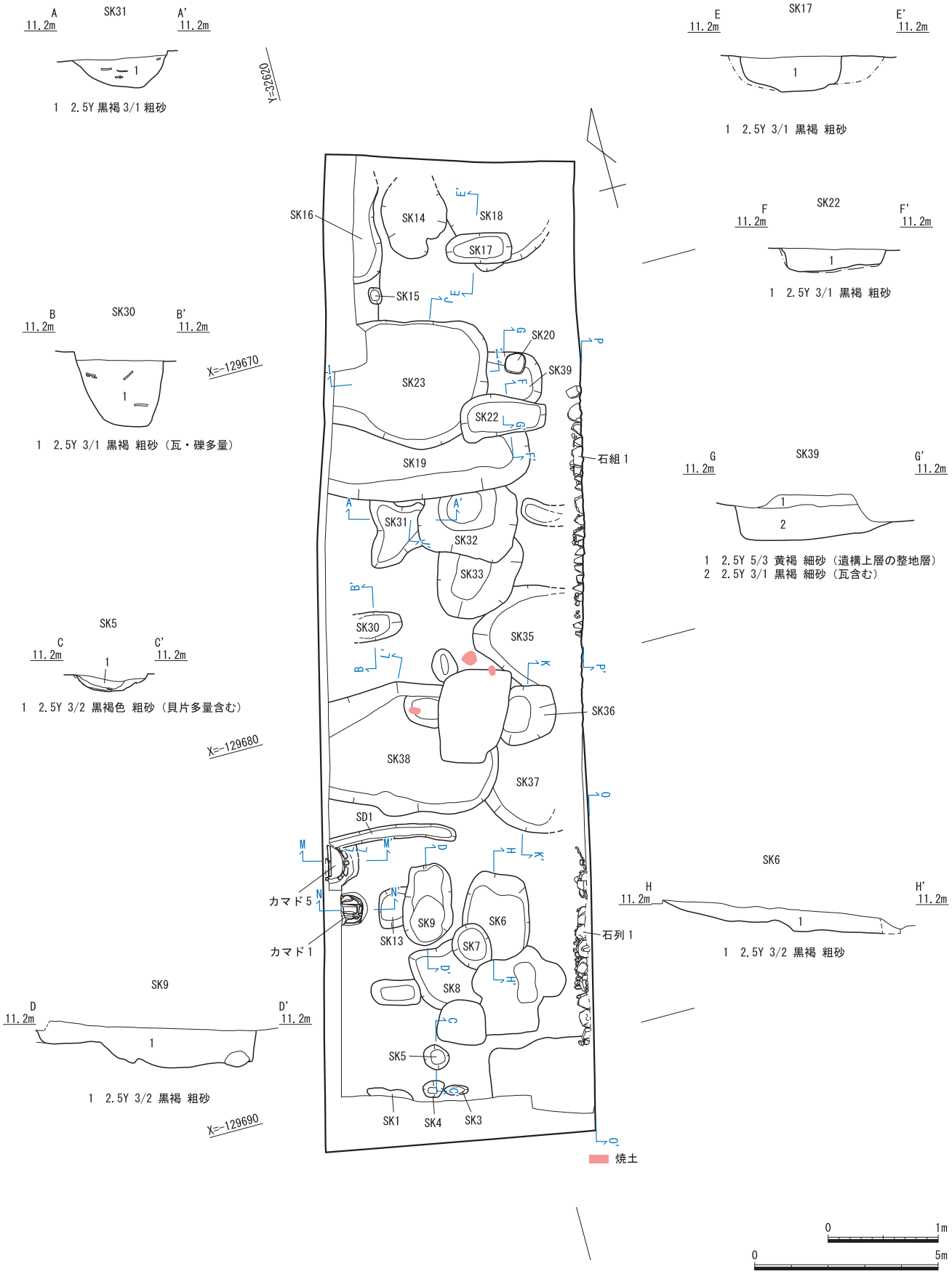
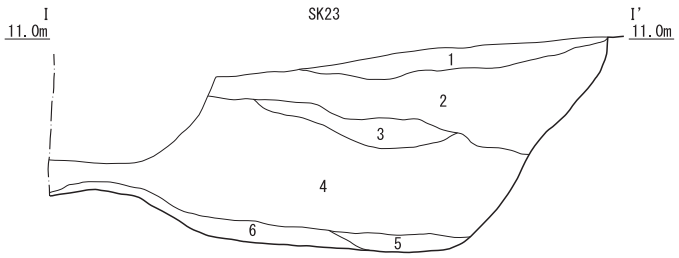
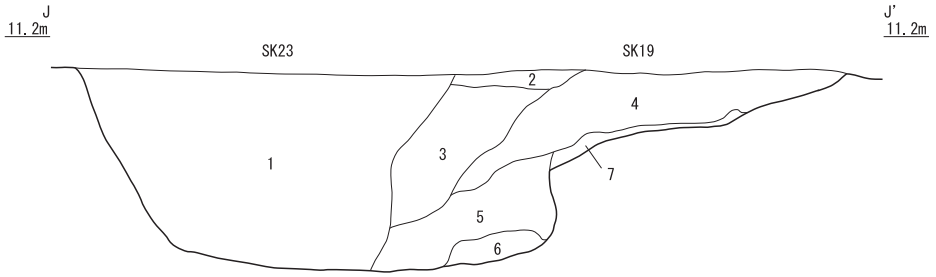


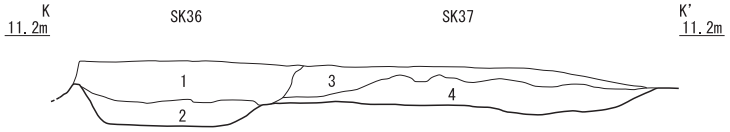
図3　第1面平面図（S=1:150）・各遺構断面図（S=1:50）



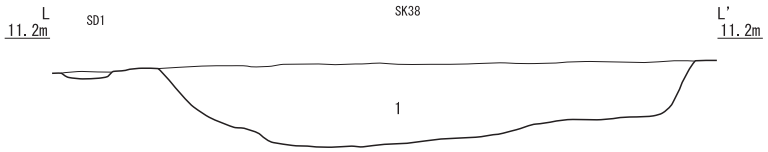
1　2.5Y 3/1 黒褐 粗砂
2　2.5Y 3/2 黒褐 粗砂（瓦多量含む）
3　2.5Y 5/2 暗灰黄 細砂（粘質）
4　2.5Y 3/1 黒褐 粗砂（瓦多量含む）
5　2.5Y 3/3 暗オリーブ褐 細砂
6　5Y 5/3 灰オリーブ褐 細砂



1　2.5Y 3/2 黒褐 粗砂（SK23）
2　2.5Y 3/2 黒褐 細砂（SK19）
3　2.5Y 3/1 黒褐 粗砂（SK19）
4　2.5Y 3/2 黒褐 粗砂（瓦中量含む）（SK19）
5　2.5Y 3/2 黒褐 粗砂（瓦少量含む）（SK19）
6　2.5Y 4/2 暗灰黄 細砂（SK19）
7　2.5Y 5/3 暗灰黄 細砂（SK19）



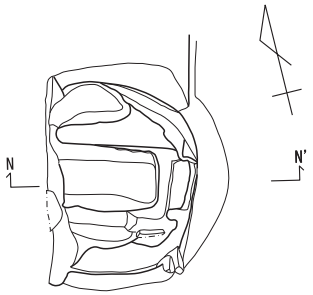
1　2.5Y 3/2 黒褐 粗砂（瓦多量含む）（SK36）
2　2.5Y 3/1 黒褐 細砂（瓦中量含む）（SK36）
3　2.5Y 4/3 暗灰黄 細砂（SK37）
4　2.5Y 3/3 暗オリーブ褐 細砂（礫混じり）（SK37）



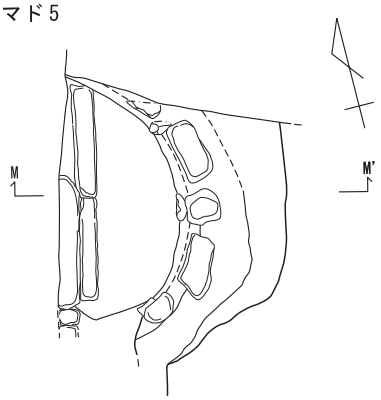
1　2.5Y 3/2 黒褐 粗砂（礫多量）

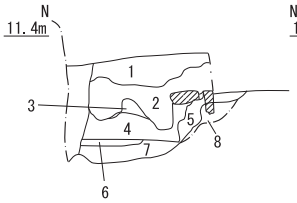
0　1m

カマド1

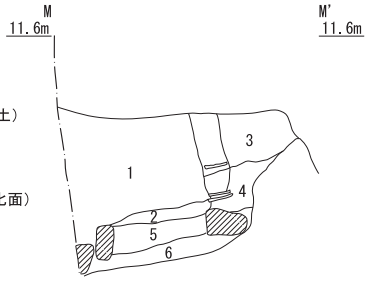


カマド5





1　2.5Y 3/2 黒褐 粗砂
2　2.5Y 3/1 黒褐 細砂
3　7.5YR 5/6 明褐 細砂（焼土）
4　5YR 4/8 赤褐 細砂
5　7.5YR 4/6 褐 細砂
6　10YR 3/1 黒褐 細砂（硬化面）
7　5YR 5/6 明赤褐 粗砂
8　7.5YR 4/6 褐　細砂



1　2.5Y 3/2 黒褐 粗砂
2　2.5Y 5/2 暗灰黄 細砂
3　2.5Y 4/2 暗灰黄 細砂（礫混じり）（炉壁構築土）
4　2.5Y 4/1 黄灰 細砂（炉壁構築土）
5　10YR 4/2 灰黄褐 細砂
6　2.5Y 5/2 暗灰黄 細砂（地山）

0　1m

図4　第1面各遺構断面図（S=1:50、S=1:30）

石列１

石組１

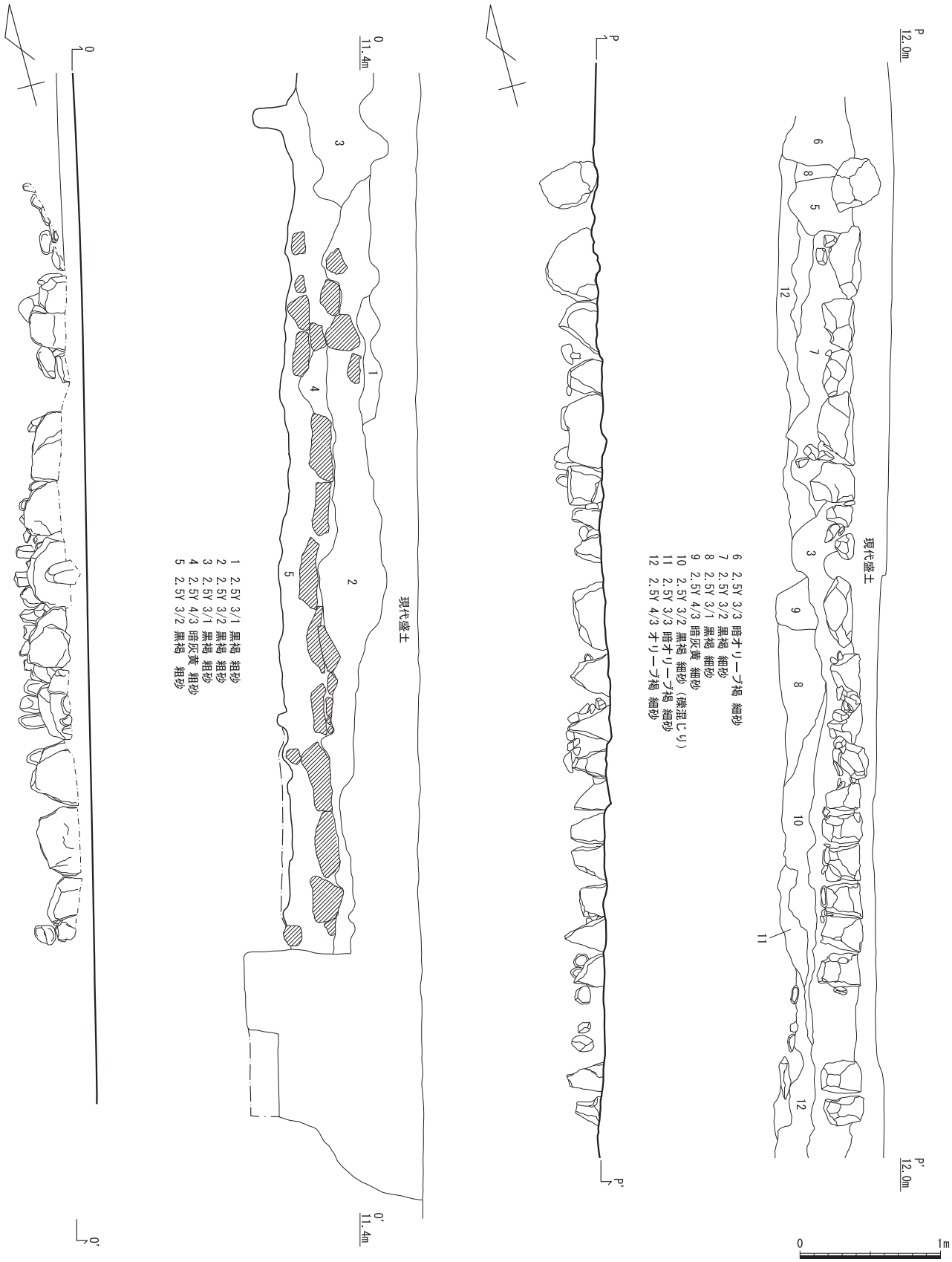


図5　石組1、石列1実測図（S=1:40）

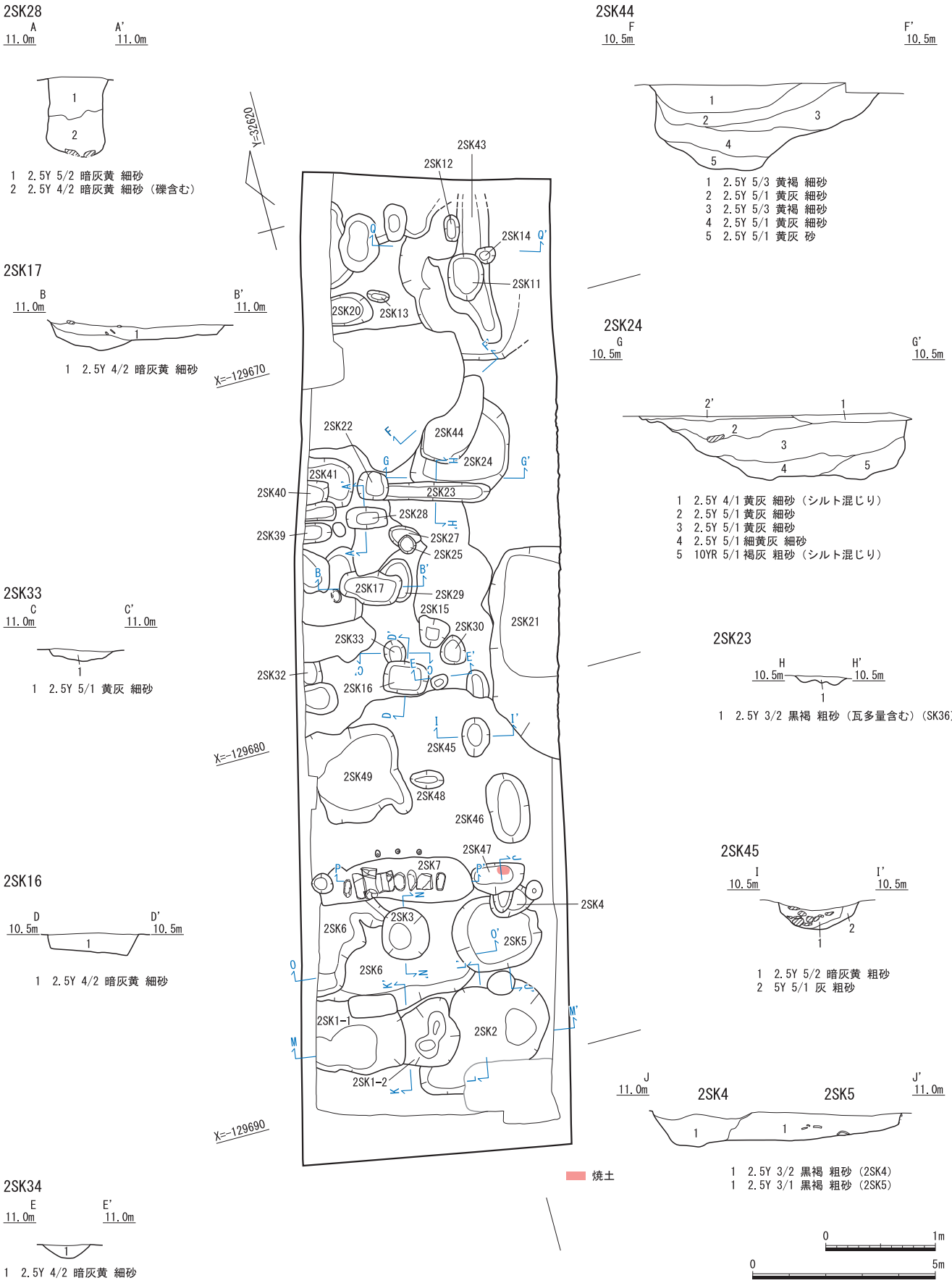


図6　第2面平面図（S=1:150）・各遺構断面図（S=1:50）

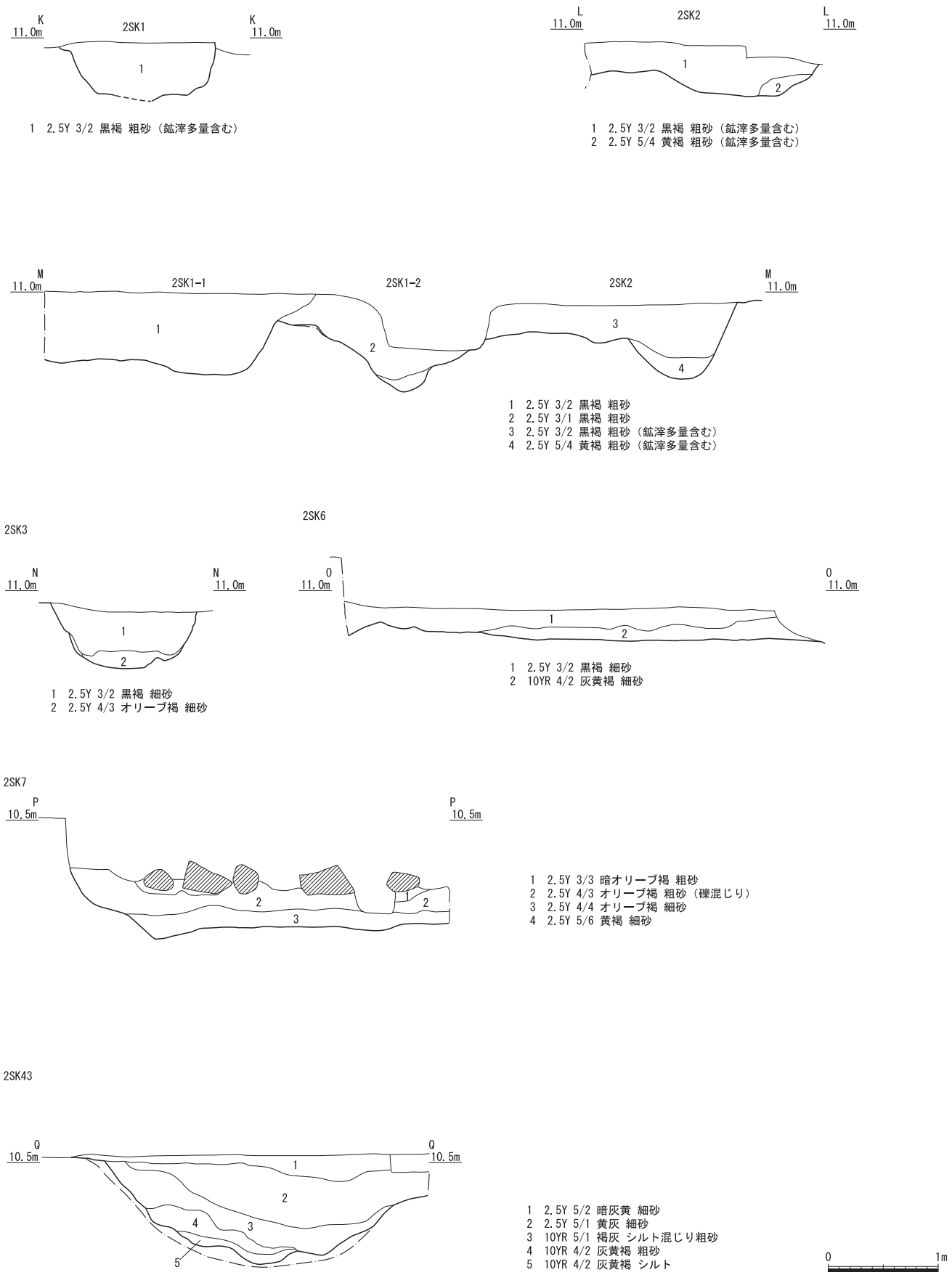


図7　第2面各遺構断面図（S=1:50）

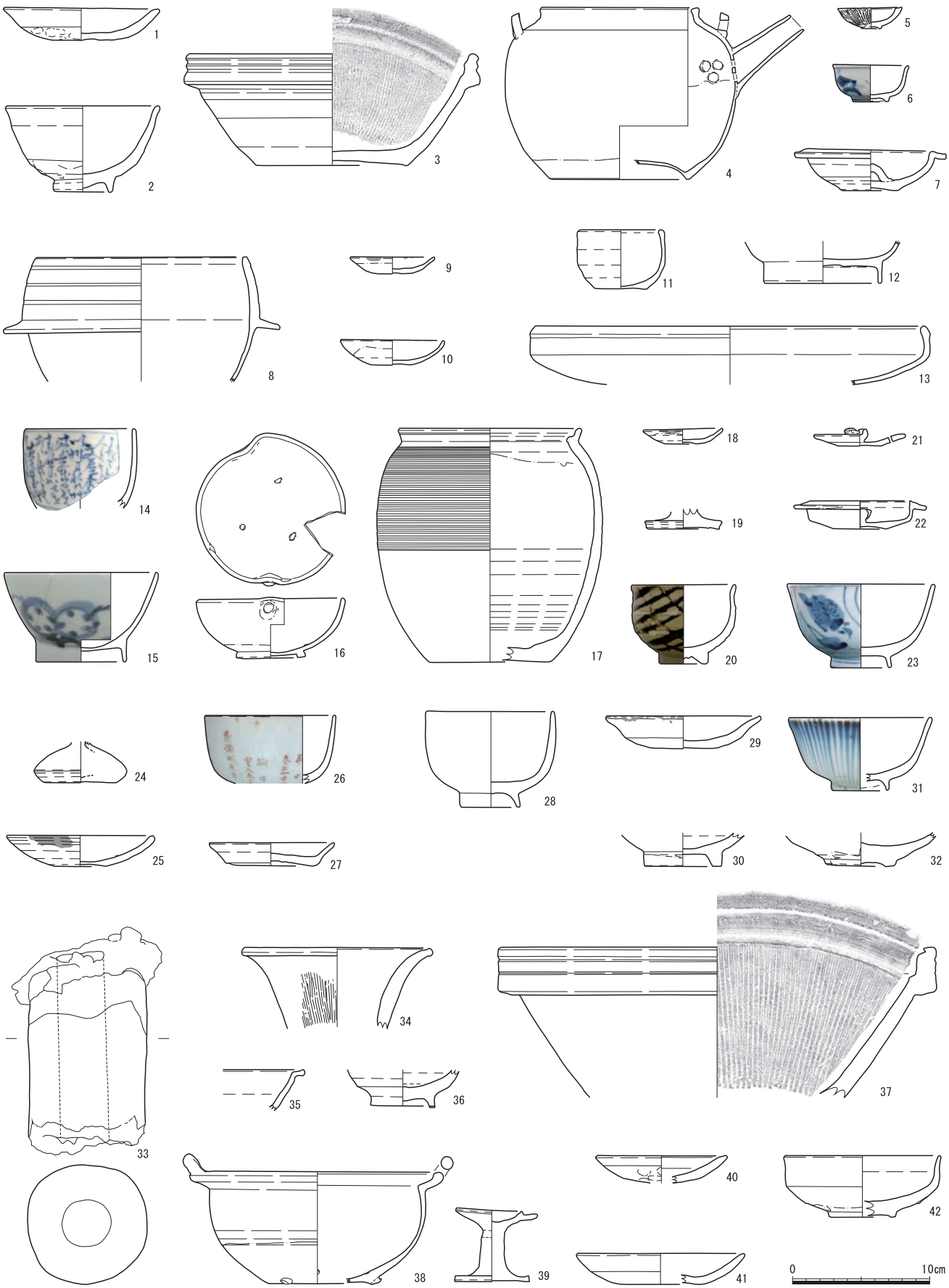
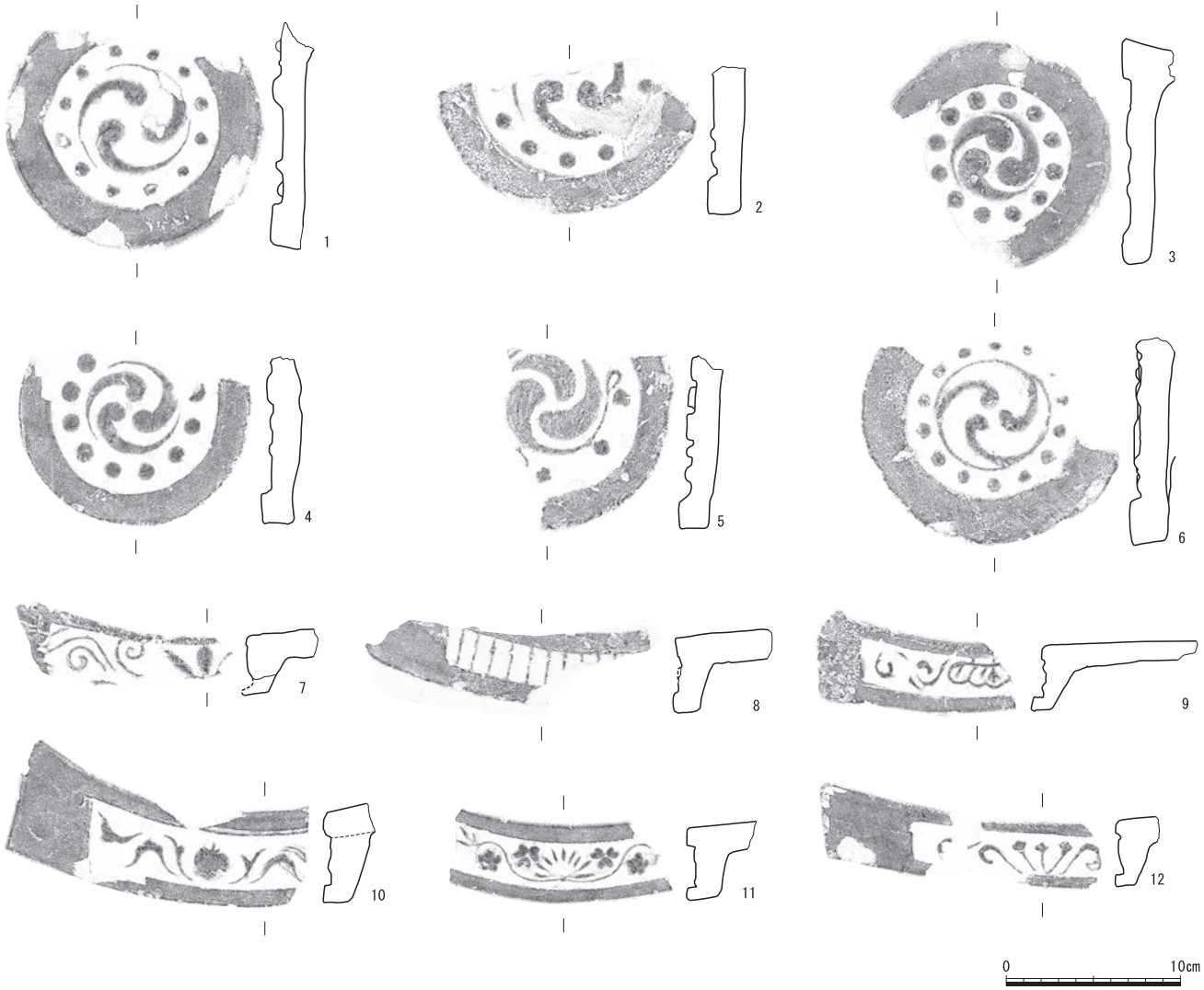


図8　遺物実測図1（S=1:4）



2SK1出土鞴羽口と砥石

出土軒平瓦

2SK16出土焙烙

図9　遺物実測図2（S=1：4）及び遺物写真

第1面全景（北半）（南から）

第1面全景（南半）（北から）

写真図版 2

カマド1検出状況(東から)

カマド1完掘状況(東から)

カマド5検出状況(南から)

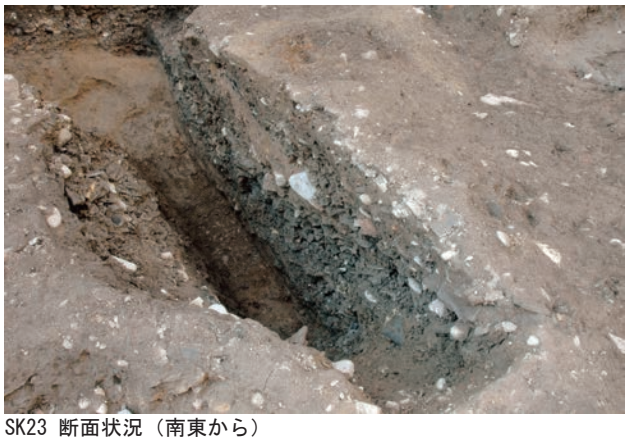
カマド5断面状況(南から)

カマド5断割状況(南から)

カマド5下部構造状況(東から)

SK6 断面状況 (南西から)

SK23 断面状況 (東から)


SK23 断面状況（南東から）

SK19・23 断面状況（西から）

SK35 断面状況（南東から）

SK36・37 検出状況（南西から）

石列1検出状況（北から）

石組1検出状況（南西から）

石組1検出状況（南西から）

写真図版 4

第2面全景（北半）（西から）

第2面全景（南半）（北から）

2SK1断面状況（南から）

2SK2断面状況（南から）

2SK7検出状況（東から）

2SK7断面状況（南東から）

2SK7下層断割状況（北から）

2SK28断面状況（東から）

2SK43断面状況（南から）

報告書抄録

ふりがな	ひめじじょうじょうかまちあと
書名	姫路城城下町跡
副書名	姫路城跡第394次発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第78集
編著者名	山下　大輝
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター
所在地	〒671-0246　兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1　TEL（079）252-3950
発行年月日	平成31年（2019年）3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
姫路城城下町跡（ひめじじょうじょうかまちあと）	兵庫県姫路市立町14番地（ひょうごけんひめじしたてまち）	28201	020169	34°49′49″	134°41′24″	2018.7.10～2018.9.28	389㎡	店舗建設

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	遺跡調査番号
集落跡	江戸時代	石組、石列 カマド、土坑	土師器、施釉陶器、 焼締陶器、瓦	20180141

要約	今回の調査では江戸時代の遺構を数多く検出した。第１面では、石組と石列を検出した。これらの石組、石列は立町境の背割りを示すものと考えられる。また石組と石列には時期差があり、近世から近代、そして現代まで地割が踏襲されていることが明らかになった。第２面では、土坑を数多く検出した。それらのうち調査区南部では鞴羽口や鉱滓が多量に出土する土坑を複数基検出した。これにより調査地を含めた周辺域において鍛冶関連施設が存在した可能性を窺うことができた。また遺構分布をみると、遺構の多寡が屋敷境を表すとの既往調査の成果を追従する成果が得られた。

姫路市埋蔵文化財センター調査報告第78集

姫路城城下町跡

－第394次発掘調査報告書－

平成31年（2019年）3月31日発行

編　集　姫路市埋蔵文化財センター
〒671-0246　兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1
TEL（079）252-3950

発　行　姫路市教育委員会
〒670-8501　兵庫県姫路市安田四丁目1番地

印刷・製本　内海印刷株式会社
〒670-0808　兵庫県姫路市白国五丁目12-41